



20230605号	歴史と芸術が交差する心の拠りどころ —上海宝山寺—	所長助理	徐潔
20230612号	現代京劇 駱駝祥子	所長	南浦秀史
20230619号	上海最南端のフロンティア	副所長	小森亮人
20230626号	サントリー100周年特別展	秘書	孫芸

歴史と芸術が交差する心の拠りどころ—上海宝山寺—

2022年以降、上海で「まるで京都のような雅な建築造形と風景を味わえる」として人気を集めている寺院があります。それが上海宝山寺です。この寺は宝山区に位置し、約500年の歴史を有する仏教寺院です。2月に、友人の誘いで宝山寺を訪ねました。

上海宝山寺の歴史は明代にまで遡ります。1511年に原形となる建造物が建立され、清代の1762年に大規模な修復が行われました。戦乱や社会変革の影響で何度も破壊されたり廃れたりしては、その都度、力強く蘇ってきました。1988年に修繕と「宝山寺」への改名、2005年の移転及び伝統的なレイアウトと晩唐宮殿式の建築様式での再建が行われました。紫檀(マメ科ツルサイカチ属の高級木材)の組み合わせ構造が特徴的であり、釘をほとんど使わないという類稀な宮大工の匠技が見て取れます。寺院内はとても静かな雰囲気、中国で時折見かける商業的な観光用のお寺とはまるで様子が違います。

山門、天王殿、鐘楼、鼓楼、大雄宝殿などの建築物があり、穏やかで荘厳な雰囲気を醸し出しています。特に観音殿はとても希少な一体式構造で、花開見仏殿や円通宝殿には美しい仏像や壁画が祀られています。また寺院内には6本の青石龍柱や10基の漢白玉仏塔もあり、仏教のみならず芸術に興味のある者であれば、その造形的な見所が満載です。

ここは清らかな環境と調和した自然も楽しむことができ、心の癒しを求める人々にとって理想的な場所です。慌ただしい現代生活を送る人々に、たまに足を延ばし、ぜひともこの上海の文化空間に立ち寄ってみて欲しいです。



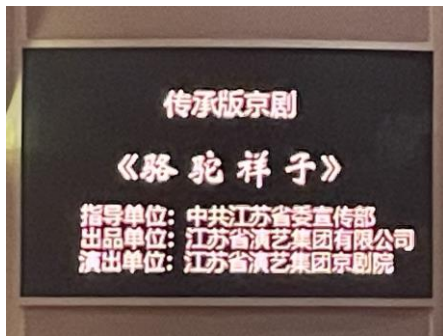
現代京劇 駱駝祥子

上海市の中心部、人民広場から福州路を少し東に行ったところに、京劇専門の劇場「上海天蟾逸夫舞台」があります。コロナ政策緩和後、週に3〜4作品が上演されています。久しぶりにサイトをのぞいていたら昔、文庫で読んだ駱駝祥子が上演されるとあったので、思わずその場で予約をしてしまいました。

駱駝祥子は1920年代の北京が舞台の小説です。時代に翻弄される労働者が主人公で、哀しい物語だったという印象でした。舞台の方は、小説を時には大胆に解釈し、おもしろおかしく観る人を楽しませつつ、小説がもつ悲哀性を訴えるといった内容で、この観点では、伝統的な京劇に通じる題材なんだと納得しました。

京劇というと、古い伝統的なものというイメージですが、歌舞伎に現代風歌舞伎があるように、京劇にも現代のストーリーを扱ったものがあります。照明や音響は昔のままがいいと思う反面、それは年齢とともに新しいものに対する受容性が鈍ってきているのかなあと反省しているところです。

コロナ対策がとられていた間は、座席も間引いて販売され、盛り上がりにも欠けていましたが、いまは完全に元どおりになり、劇場内はすごい熱気です。あの銅鑼や鉦の京劇独特のリズムと二胡や琵琶などが奏でる旋律に合わせて、磨かれた芸を披露する俳優は本当に素晴らしいと思います。私も早く中国の観客と一緒に、いい演技に対して大きな声で「好(はお)！」と掛け声をかけられるようになりたいと思う今日この頃です。



上海最南端のフロンティア

上海タワーや高層ビルが立ち並ぶ浦東のパノラマは上海を代表する光景としてあまりにも有名ですが、上海市の区分では市の中心を流れる黄浦江東側一帯の広大な地域を「浦東新区」という一つの行政単位としています。区南側は市中心部と比べて開けた市街地が広がっており、未だ大きな開発余地を残す地域として市を挙げて様々な事業が進められています。

その最南端に位置し東シナ海に面する臨港(りんがん)地区では、先日水素分野に関する日中産業フォーラムが開催され、多数の専門機関や企業が参加していました。水素をはじめとする先端産業の集積は中国各地で推進されている取り組みですが、この地区はその他にも、臨海地域として港湾設備や保税區などの貿易インフラを備え、越境 EC の物流拠点としても期待されています。また、天文博物館の上海天文館や上海海昌海洋公園という遊園地が開設され、産業以外の面にも独自性を持つエリアとなりつつあります。

市中心部から臨港地区へは電車で2時間以上かかるにもかかわらず、上海天文館内の宇宙空間の映像を楽しめる大スクリーンや上海海昌海洋公園に設けられた漫画 ONE PIECE をテーマにしたショップが現在人気を集めており、現地 SNS ではこれらの場所で撮影された写真が多数投稿されています。

様々な開発事業が競い合うように進む上海の中で、今後この地域がどのような存在感を放ってゆか興味深いところです。

サントリー100周年特別展

6/17(土)に上海展覽センターで開かれたサントリー100周年記念限定商品発表会を見に行ってきました。サントリーと言って、思い浮かべるのは「プレミアムモルツ」、「山崎」などのお酒や「ウーロン茶」「伊右衛門」などの清涼飲料水で、日本を代表する飲料メーカーです。

この展示面積は6,528平方メートル、17の展示室があります。フィルムギャラリーを歩きながらサントリー100年の歴史を振り返れます。展示エリアは3人のチーフブレンダーが生きた時代ごとに分けられており、まず山崎のコーナーでは、創業者である鳥井氏の先駆的な姿勢が紹介されています。人と自然と響きあいの体験空間に包まれて、豊かな自然の魅力と作り手の想いを体感しました。

次の展示エリアでは、知多、白州、響の紹介が行われていました。このエリアでは、Tory's Barで3種類のウイスキーのいずれかを試飲できます。またインタラクティブなポイントがたくさんあり、映画のセットを再現したエリアでは、記念写真を撮ることもできました。

最後のエリアでは、山崎、白州の限定シリーズのウイスキーが紹介されていました。発表会の各テーブルの上に、サントリーウイスキー100周年記念蒸溜所ラベルが貼られたシングルモルトウイスキー「山崎」「白州」が入ったテイスティンググラスが置かれており、観客は自由に手に取って香りを楽しむことができます。お酒を飲んでいる方はもちろん、普段お酒とあまり縁がない方でもサントリーの商品を身近に感じ、歴史を知ることによって、今まで何気なく飲んでいたお酒がより味わい深く感じるように思います。